

## 自己の模索

小川<sup>おが</sup>原<sup>わら</sup>正<sup>まさ</sup>道<sup>みち</sup>

(慶應義塾大学法学部教授)

今回のコンテストの最終審査対象作品のうち、「文学は社会の役に立つか」をテーマに選んだ作品が最多を占め、小泉信三賞の稲垣論文もその一編である。若者の活字離れが叫ばれるなか、自らの読書体験を織り交ぜながら文学の「有用性」と格闘した力作が多かったことに、驚きと希望を感じた。

まずは稲垣論文を取り上げておこう。文学は社会の役に立つか、を問う際の即効性や実用性を偏重する姿勢こそ問題であるとする著者は、言葉の持つ力を「言葉」やキング牧師の名言などから引き出し、人間の言語の特徴として抽象的概念を持つことを挙げる。人間はそれによって世界を理解し、説明しようとしてきたとして、文学の価値を説く。引用、論理

構成ともの確であり、小泉信三賞にふさわしい論文として評価された。

次席の鷺山論文は、『東京家族』『男はつらいよ』『万引き家族』という映画から、家族が変化し、日本人が大きな「忘れ物」をしてきたのではないかと問う。その回答として、『大家さんと僕』を参照しながら、家族の原像である「心の拠り所」「伝えること」を見いだし、生きている人の息遣いや思いを共有する、「創造する家族」の可能性を提唱する。映画などから巧みにエッセンスを読み取り、自らの論理を構築させている好論文である。

以下、佳作三編について。佐藤論文も家族に関する論文だが、アプローチが深い実体験に基づいている。祖父を喪った著者は、祖父が延命治療を望んでいなかったという事実をきっかけに、延命治療問題に取り組む。果たして延命治療は誰のためなのか、家族の自己満足のためではないか、患者本人の幸せが一番大事ではないか、と著者は訴える。

早坂論文は、福澤諭吉の『学問のすゝめ』を「実用的な観点」から取り上げ、現代日本においても実学の書として役割を果たしているかを考察した。その考察の

なかで、著者は福澤が公共や日本に対する貢献を強調していることに驚き、公共の精神と独立の精神とは両立、さらに相乗効果を生んでいると説き、成熟社会において自分本位の思考から離れる必要を感じて、平成最後の高校生にとっても同書は役立つという結論に達した。

一方、宮下論文は、進路選択時に文系・理系に分けることの長所・短所を分析した上で、文系・理系という視野の狭さにより、社会に属する一市民としての役割を果たせないことになるのではないかと問う。文系の人が二七科学商品にだまされたり、理系の人が世界史を踏まえない発言を海外でしてしまう、といった問題であり、著者は、文系・理系の垣根を越えた幅広い視野をもつ市民の必要性を主張する。

文学を読む自分、家族の一員としての自分、高校生としての自分、市民としての自分……。自分自身のあり方を問い直しながら、今回の応募作品は書かれたといっていだろう。その意味で、応募者各位にとって、受賞の是非も重要だが、執筆というプロセス自体が人生の糧となってくれたらと思う。